
『懺悔の時間』

巡芳もとめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『懺悔の時間』

【Nコード】

N8926W

【作者名】

巡芳もとめ

【あらすじ】

軽い気持ちでクラスメイトの雪兎ゆきとをからかったことから彼の怒りを買う、長期に渡る懺悔むじをするはめになった聖ひつじ。一体あと何回懺悔すれば解放されるのか。そんな懺悔の日々の中で、それまであまり言葉も交わしたことのなかった二人の関係がだんだん変化していく。

「懺悔の日々のはじまり」

これでもかというほど上から目線で俺を見下ろす雪兎^{ゆきと}。眼鏡越しにのぞくその目は冷血人間そのもの。偉そうな態度で腕を組み足を開いて座る奴の前に俺はひれ伏す。

「聖^{ひじり}、懺悔の時間だ。今日も俺に許しを乞え」

一体あと何回懺悔すればいいんだ。何回許しを乞えば許しを得られるんだ。

「くっそ……ム力つく」

小声で悪態づいたつもりだったが、雪兎におもいきり頭を叩かれた。両手で頭を抱える俺。

事の発端は、俺がふざけて雪兎の眼鏡を奪ったことに始まった。些細なことだ。悪気なんてなかったし、休み時間まで熱心に教科書を読み予習復習している奴をからかおうと、軽い気持ちで眼鏡を奪い取った。ただそれだけの事だったのだが……。

「俺はな、眼鏡取った顔を人に見られることが嫌なんだよ。おまえにとっては些細なことかもしれないが、俺にとっては、地球が滅亡するくらいの一大事なんだよ!!」

怒りに震えぶち切れながら俺の胸ぐらを掴んで雪兎は言った。

「そんなにっ!?!」

彼の例えの規模があまりに想像を越えすぎて、俺はついすかさずつつこみを入れてしまった。そのつつこみによって更に彼からの怒りを買うはめになった俺。

「おまえのような女みたいな軟弱な顔した奴には俺のコンプレックスなんて到底理解出来ないだろうな」

コンプレックスなんてあったんだと俺は首をひねった。なぜなら、雪兎は自覚こそないものの、近所にある女子高の女子たちからもモテていたからだ。ちゃらけた俺とは正反対の秀才系のクールな外見。眼鏡が似合うイケメンとして追っかけもいる。なのにコンプレックス

スだなんて贅沢極まりない野郎だと思った。

しかし尋常ならぬ怒りを買ってしまった俺は、授業が終わると毎日こうして奴の前に土下座させられ、反省の言葉を述べさせられるはめになった。

この懺悔の日々もとうに1ヶ月になろうかとしていた。

「おまえドSすぎだぞ！」

と言い返したこともあるが、雪兎は、

「おまえのやった行為こそが、この上ならぬドS行為だ。このサデイストがつー！」

と吐き捨てやがった。えー……と納得いかない声を漏らす俺の頭を奴はまた叩いた。そのうち足で頭を押さえつけられるのではないかと思うと、俺の心は折れそうだった。

「さんざんな朝」

ままごとごつこのように俺と雪兎の懺悔ごつこは続き、一向に俺を解放してくれる気配もなく今日も朝を迎える。

校門を前にして、はあ、と溜め息をついた瞬間「おい」と呼び止められ俺は振り向いた。

雪兎は自慢の眼鏡をキラリと光らせ、

「今日はおまえに頼みがある」

と笑いもせず言った。この上にまだ俺に何かやらすつもりか。

「冗談じゃねーよ……」

そんな俺の言葉も却下され、朝っぱらから俺は雪兎にぐいぐい腕を引っ張られ屋上へと連れて行かれた。

ゼーゼー息を切らしながら屋上へと続く階段途中、俺はふと嫌な予感が頭をよぎったが、バカバカしいとその考えを抹消した。

「暑っ」

太陽にじりじりと焼かれる屋上の地面。靴の上からでもその暑さが伝わってきた。

「で、頼みつてのはだ」

振り返り雪兎は俺の茶髪のもじやもじや頭の上に手を置いた。急に何なんだ気持ち悪いーな、と拒絶する間もなく、奴は俺をハグした。

「……え？ 何これ？」

ただされるがままに立ちつくす俺。

「あいつの前でだけ、恋人を演じて欲しい」

俺の耳元で雪兎は言った。「奴って誰？」と小声で問い後ろを振り返ったとき、視界に怪しい人影がちらりと見えた。いや、正しくはだいぶさつきから気がついていて、その背後にある気配に。だから嫌な予感がしていたんだよ。振り返る俺の顔を自分の方へ手でぐいっと向かせる雪兎。

「あれって……」

と喋りだそうとする俺の言葉を雪兎は「しっ」とさえぎった。

屋上に入る扉の向こうに何者かがいる。あれって、確か噂で聞いたことはあるが、雪兎に何度も告ってくるっていう、あの何だっけ、名前が確か……

「わいふ 慍だ」

うちの男子校には妙なルールがあって、親近感を深める作戦なのか、みんなお互いがお互いを下の名前で呼び合うという決まりがある。入学した当初は何だそりやと思ったものだが、もうすっかり慣れてしまっている自分がいる。

「あ、そうそう慍。で、だからって何で俺がそんな面倒臭エことしないとならないんだよ」

「おまえ罪人だろが」

ハグをやめて急にまた態度でかく振る舞い、ついには俺を罪人扱いまでもする雪兎。

これだけ毎日俺をいたぶっておきながら、更に過酷な難題を課するというのか。何て奴だ。しかもそのためなら、こうして平気で自分が嫌いな奴にも抱きつくのかよ。

「とにかく慍の前ではおまえが俺とデキてるってことにしろ」

「何でだよ」

「おまえは罪人だからだよ。これも刑の一環だ。喜んで従事しろ」
背後にまだその気配がある。

「あいつの変態性としつこさにはうんざりしてる。お前があいつを何とか説得しろ。俺と付き合っていると何とか言ってる」

冗談やめてくれ。俺は早く教室に戻りたかったが、雪兎が俺の前に立ちはだかり、俺がこのミッションを承諾するまで行かさないという姿勢を通した。

暑くて頭がふらふらする。どこまでこの男はドSなのだ。

もう何にでもどうにでもなれ、と諦めの境地に達したとき、雪兎はもう一度俺を抱き返してきた。

「暑っ……ていうか、キモい……」

なす術もなく俺は雪兎の肩に顔を埋めたため息をつく。

その間も俺の背後にはびしびしと嫉妬と嫉みの念がつき刺さっていた。

俺は完全に雪兎の奴隷となっていく。

「雨の残り香」

授業中、頼杖をつきながら窓の外を見る。久しぶりの雨。

窓際の席に座る俺の目の前の席が雪兎の席。国語の授業。熱心に黒板の文字をノートに書きうつし、先生の話に集中して聞き入っている。光源氏がどうのこうのとかいう授業。

先生が黒板の方を向いた隙に、俺は雪兎の背中をシャーペンの芯の方で軽くつついた。

「いてっ」と小さく声を漏らし背中を片手で押さえ、雪兎は俺の方を振り返り睨んだ。

「授業で分からないところがあるんだけど、教えて」

勉強に関する真面目な話なら乗ってくれるかもしれないと思った俺は、そんな嘘を試してみた。

「どっ……」

俺の予想は当たり、雪兎は嫌々ながらも少しこっちに身を乗り出してきてくれた。

「光源氏ってさ、何でそんな女にモテモテだったわけ？」

くだらないと思ったのか、雪兎は無言で前を向き直した。その後何度か背中をつついたりしてみたが、奴はもう振り返らなかった。放課後、今日こそは「懺悔の時間」を逃れ帰ってやろうと思ったのだが、下駄箱で奴は待ち構えていやがった。

雨はまだ止まない。

図書館で俺はいつものごとく、雪兎の前にひれ伏し反省の言葉をべらべら述べさせられる。

「人の心の痛みも分からない人間でごめんなさい。軽率で浅はかな態度によって人を愚弄してごめんなさい……」

反省を述べてる間、雪兎は上から俺を見下ろしじっと見ている。

「ねえ、一体いつまで懺悔すれば俺は解放してもらえんの？」

土下座してた顔を上げ俺は質問する。

「おまえが本当に心から反省して俺に誠意を見せるまでだ」
当然だろと言わんばかりに雪兎は言った。

「反省してるじゃん。誠意見せてんじゃん？」

反論する俺を見て雪兎は首を横に振った。

「その開き直った態度が反省してない何よりの証拠だ」
言われて何も言い返せなくなる俺。

「だいたい何がそんなにおまえの逆鱗に触れたわけ？」

それを何より聞きたい。ここまで懺悔させられないとならないほどの大罪を俺は犯した覚えはない。

雪兎は椅子から立ち上がると、窓辺に立ち俺に背中を向けた。

「……俺にとってこの眼鏡はカモフラージュのようなもので、コンプレックスを隠してくれる大事な防護服みたいなもんなんだよ」

「だから何でそんなコンプレックスがあるわけ？」

さっきまで雪兎が腰かけていた椅子に俺は腰掛け質問した。

開いた窓から雨の匂いが流れこむ。雨の匂いに俺は何かを思い出しかけた。

「忘却のかなた」

「おまえは覚えてないだろうな」

雪兎の言葉に俺は自分の記憶の中に引っかかる何かを引き出そうとした。けど、寸でのとこでそれは消え去る。

「高二に上がったばかりのとき、俺の後ろの席がおまえになって、俺は内心喜んでいた」

「喜ぶ？」

一体何の話をしているのかさっぱり見当もつかない。俺は目を閉じその当時のことを光景を思い返してみたが、やはり何も思い出せなかった。

「授業中、ふと眼鏡のレンズを拭こうと眼鏡を取ったときだった。

おまえは眼鏡をとった俺の顔を見てこう言った……」

何を言ったんだ。全然覚えてねえ。何かまずいことでも俺は言ってしまったのか。雪兎はそれを根に持ってたのか。しかし、雪兎はその続きを喋りださない。

「……で、何て言ったわけ俺は？」

そう言つと、雪兎がずんずん俺の方へ向かって歩いてきた。俺は思わず身構え仰け反った。殴られるのではないかと思つて。

「……おまえはこう言った。“雪兎って眼鏡とると、幼い顔してんだな”」

俺は拍子抜けする。

「それだけ？」

啞然として口を開ける俺に雪兎の顔がこわばった。幼いと言われたことがそんなに気に障ったのか。もつとひどいことを言ったのかと思つたが、たったそれだけのことで？ と俺は首を傾げる。

その時、俺ははつと突然思い出した。覚醒するかのようにある記憶が俺の思考を貫いた。

そうだ、そのあと俺はその日の帰り、傘をさして下校する雪兎を

追いかけて……

「そして俺にキスをした」

わなわな震えながら雪兎は言った。

「何でそんなことしたんだっけ俺？」

「またもやぼかんと口をあけて他人事のように言う俺に雪兎は、

「んなこと俺が知るかあっ！！」

と顔を真っ赤にして激怒した。たぶんきつとアレだ。眼鏡をとると幼い顔してんだと言ったとき、雪兎がやたらいてもたってもいられない顔をしてうつむいたもんだから、それを愛おしく思ったんじゃないのか？

「うん。たぶんそんなところだろう」

自分の中だけで納得して腕組みしながらうんうん頷く俺の頭を雪兎がぶった。

「自分の心の中だけで喋って納得するな！ 理由を言え！ 理由を！ だいたい、なんでそんな重要なこと忘れることができるんだよ？」

「記憶力が良くなって。まあ、簡単に一言に集約して言うとな。好きだったんじゃないの？」

その言葉に奴はかたまった。

「ば、バ力を言え。普段全然喋りもしないのに、何でそんな急に……」

しどろもどろに言う雪兎。

「あ、それで、何で俺の前の席になっておまえは喜んでたわけ？」

さっきから気になっていた疑問を掘り返して再度聞く。

「それは……」

「それは？ 好きだったから？」

また頭を殴られた。

「おい、何回殴れば気がすむんだおまえは？！」

「おまえが先に言うからだろボケ！」

「だってバレバレだし！！」

また雪兎がかたまる。反応があまりにも分かりやすく笑える。
だんだん奴をからかうことに快感を感じてくる俺。

「な、何がバレバレなんだよ？」

「おまえの態度だよ」

「とにかく俺はな、それから眼鏡をはずすことが嫌になった。眼鏡をしていれさえすれば俺は安全でいられる！」

意味が分からない。それって、幼いと言われたことよりも、俺からの不意打ちを受けたことに対する防御ってことじゃないのか。

「意味がわからん」

部屋を去ろうとする俺の肩を雪兎がつかんだ。

「おまえはいろいろな意味で俺を見下したんだ。たった今もだ。俺をもて遊んで楽しんでやる」

ぎくりとする俺。楽しんでるのバレてたか。あははと頭をかいて笑い誤魔化す。

「だからだ、おまえは俺にいろいろな意味でこれからも懺悔してその罪を悔いねばならないのだ！」

怒りに震える雪兎を見てるとまたからかってやりたい衝動にかられる。俺は奴の頭に手を置いて「まあまああ」となだめすかした。
「だあつ！ またそういつつ！」

雪兎は俺の手を思い切り振り払った。

「いいじゃん。俺のこと好きなんですよ？ もういいじゃんそういうことで」

俺の軽々しいあつけらかんとした態度は雪兎を何度でも怒らすことが出来るようだ。俺のその態度と物言いにまたぐち愚痴る彼。
「この懺悔の時間だって、俺と毎日一緒にいたいからなだけだろ」
ふんぞり返り鼻で笑う俺。

「俺はこれまでまともにそんなおまえと話したこともなかったし、おまえみたいなちゃらけた奴は嫌いだった」

「え？ でも高二に上がって席が近くになった時から俺のこと好きだったんでしょ？」

つじつまの合わない雪兎の説明。

「俺が言う“これまで”ってのは、高一の最初の時のことを言ってるんだよ！」

思わず腹を抱えて笑う俺。どこまでさかのぼるんだよ。ていうか、一体いつから奴は俺を見てたんだ。

「で、いつから好きってのに変わったわけ？」

笑いをこらえながら涙目で聞く。

「高一の途中……」

ぼそぼそと小さい声で雪兎は言った。

「ふーん。何で嫌いだったのにそうなったわけ？」

「それも覚えてないんだな、おまえ」

覚えてるわけねーだろと思うながら、また笑う俺。俺の知らないところで、雪兎の中だけで俺との思い出がいろいろあるらしい。

「ある雨の日、俺が傘持ってたなくて下駄箱で立ってたら、おまえが二本持ってたビニール傘の一本をくれたんだよ」

そんなことあったっけ。まるで記憶にない。

「それ本当に俺？ 別人じゃなくて？」

「おまえだよ！ おまえという奴は何もかも覚えてないんだな！」

「覚えてるわけねーだろ。おまえ女みたいだな」

その言葉にまた言葉をつまらせる雪兎。また怒らせたようだ。

延々と俺達の論争は終わらない。

「懺悔の終わり」

俺の中で最も腑に落ちないことは、なぜ雪兎は俺に懺悔をさせ続けながらもそれと同時に進行で俺を好きでいるのかってことだ。本当に俺が好きなのか。

「こうして懺悔の時間は今日も無駄に続くのだった……」

放課後、今日も図書館で同じ行動を繰り返す。うんざり顔で窓の外を見やる俺に雪兎は、

「無駄とは何だ？」

と俺の制服のネクタイを引っ張った。

「もついい加減いいじゃん。反省してるよ。これからはもう二度とおまえを見下したりしません。誓います」

俺が右手を挙げそう誓いをたてると雪兎はネクタイを引っ張る手を緩めてうつむいた。

「……おまえは俺のことどう思ってた？」

確信につくことを初めて雪兎の方から聞いてきた。

「どうって、まあ好きだけど」

「友達としてか」

「友達にキスはしないだろ」

笑う俺のネクタイを雪兎はまた引っ張った。

「じゃ、このさいだから言うが、俺はおまえに懺悔しなければならないことがある」

急になんなんだ。俺達の会話はなんでこうも毎回変な方へとふらつくんだ。

「何、懺悔しないといけないことって？」

俺が顔を近づけると、雪兎は深呼吸をした。声を発しようとしては飲み込んでいる。

「早く言えよ」

無言が続く。もう一度「早く言えよ」と言おうとしたところで雪

兎が俺を真っ直ぐ見た。

「おまえがあの時キスしたのは――俺の双子の弟の方だ」

「……」

俺は天井を見上げ、空白の思考に意識を浮かばせた。
双子？

「眼鏡を取った顔を幼いとバカにしたのは、俺との事だ。が、そのあとおまえがキスをしたのは俺じゃない。弟だ」

別にバカにしたわけじゃ……いや、それよりどういうことだ。

「この懺悔の時間も、俺一人だけがやってることじゃない。弟と交互にやってる。弟はおまえからキスされたことに腹を立ておまえを懺悔させている。俺は、眼鏡のことと、それと……弟と俺を間違えてキスをしたことに対してだ！」

「おい、聞いてんのか？」と詰め寄る雪兎の声が遠く遠くなる。
俺は放心状態になった。

「……お、弟って何て名前なの？」
だるそうな顔で俺は聞く。もうなんかどうでもよくなってきた。
いろんなことが。

「弟の名前は、海斗^{うみと}だ。ちなみに、弟は本当におまえのことを嫌っている」

一番俺をもて遊んだのはおまえの方じゃないか。

どこからどこまでが雪兎で、どこからどこまでがその海斗なんだ？
そのとき、図書室に誰かがガラガラとドアを開けて入ってきた。

「クローンだ！！」

叫ぶ俺。雪兎がもう一人いる。

「聖、おまえが好きなのは俺と海斗どっちなんだ？」

雪兎と海斗が同時に俺を睨む。

どっちって、どっちなんだ。俺の中で雪兎は一人しかいないんだ。

どっちと言われても、どっちという区別がつかない。分からない。
俺は返事につまり、二人をいつまでも交互に見る。

俺はその場で土下座をし、今までで初めて、本当に心の底から懺悔をした。

そこでふと思い出す。

「そっぴえばおまえに言い寄ってるとっていうあの惺さくめってのは、おまえらが双子だって知ってんの？」

「知ってるよ。あいつは俺の方を好きだと言った」

「俺の方って、どっち……？」

今俺の目の前で喋ってるのが雪兎か海斗かもはや分からない。

「俺は雪兎だ！！」

怒る雪兎。雪兎だったらしい。

俺の懺悔はこの日で終了を向かえ、翌日から訓練が始まるのだ。どっちが雪兎で、どっちが海斗かを見極められるようになるための訓練だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8926w/>

『懺悔の時間』

2011年9月27日01時26分発行